

日本留学試験に対応した日本語学校の
新たな取り組み

——課題達成能力の育成をめざした教育実践——

嶋田和子

日本留学試験に対応した日本語学校の新たな取り組み ——課題達成能力の育成をめざした教育実践——

嶋田和子

要 旨

2002年度より開始された日本留学試験の「日本語試験」は、知識の多寡ではなく日本語運用能力を問う試験であり、日本留学試験が開始されたことによって日本語学校の予備教育は新たな視点で捉えられるようになった。本稿では、新試験の測定対象能力について考察し、試験に対応した教育実践において考慮すべき点について論述した。

課題達成能力養成をめざした授業活動は、初級段階からの実施が重要であり、それこそが日本語学校における予備教育の特徴である。そこで、日本語学校における課題達成能力養成のためのシラバスを試案として提示し、全体を把握した上で予備教育を行うことの重要性を述べた。さらに具体的な教育実践例として、話す教育を絡めた複合的な教室活動を取りあげ、総合的な試験に対応した授業の可能性を探った。

【キーワード】 日本留学試験, 予備教育, 課題達成能力, シラバス, 教育実践

1. はじめに

日本語学校で学ぶ学習者の学習目的は多様であり、教育の在りようもさまざまである。日本語教育振興協会が実施した卒業後の進路調査によると、2003年度は卒業生の68.6%が進学をしている。ここ十年間進学者の割合が常に60%台で推移していることを考えると、日本の大学など高等教育機関への進学を目的とした予備教育は、日本語学校における日本語教育の大きな課題の一つであると言える。

1984年から実施されている日本語能力試験が、大学の入学試験において日本語力の測定に援用されてきたことから、日本語学校では日本語能力試験への対応を余儀なくされてきた⁽¹⁾。しかし、日本語能力試験1級の高得点者であっても、大学で求められる日本語の運用能力が十分でないケースが見られた。そういった状況から、日本語学校現場では知識偏重教育に陥ることなく、日本語を使って何が出来るかといった運用能力を育成すべきであるという反省が起こってきた。時期を同じくして「日本の大学での勉学に対応できる日本語力(アカデミック・ジャパニーズ)をどの程度習得しているかをシングルスケールで測定することを目的とする」日本留学試験のシラバスが公開され(2000年)⁽²⁾、2002年6月に第一回試験が実施された。こういった状況の中で日本語学校現場は新たな予備教育に向けて歩み出すこととなったのである。

本稿においては日本留学試験が何を求めているのかを考察し、日本語学校での課題達成能力の育成をめざした教育実践例を報告し、日本留学試験に対応した教育実践はいかにあ

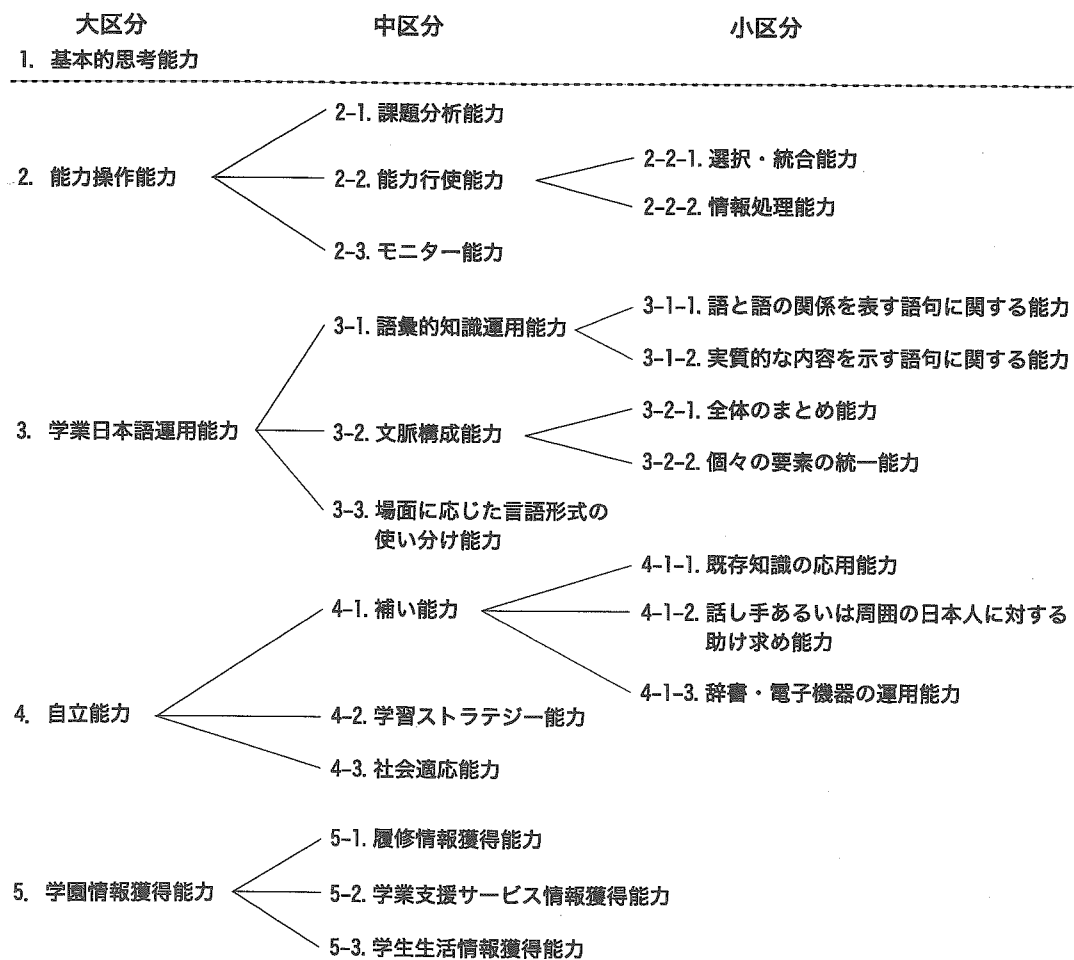
るべきかについて論述する。

2. 課題達成能力の育成

2-1 日本語教育振興協会作成の概念図

日本語能力試験の高得点者が必ずしも大学入学後学業を行うに足る日本語力を有しているとは言えないという状況に直面し、日本語教育振興協会では問題を解決すべくプロジェクトを立ち上げた。同プロジェクトでは、大学の履修要綱・授業内容をもとに時系列で活動場面を取り出し、日本語で何をすることが求められているかを考察し、そこで必要とされる技能・能力の分析を行い、基礎日本語能力に関する概念図を作成した。「学業日本語運用能力」「自立能力」「学園情報獲得能力」はそれぞれ相関性を持って行使され、その行使を管理するものとして「能力操作能力」があり、さらにそういった営みの基盤に「基本的思考能力」があるとした。

図1 概念図



(基礎日本語教育研究プロジェクト『日本語学校生のための基礎日本語能力』p.14)

日本語能力試験が技能別の科目試験であり、かつ1984年実施当初より大学の入学試験に用いられてきたことから、日本語学校では日本語力を文字・語彙・文法・読解・聴解とそれぞれ独立した技能として評価する傾向があった。しかし、上記のごとく与えられた課題を達成することの出来る能力に焦点を当てて、予備教育の在りかたを考え始めたのである。

2-2 日本留学試験と課題達成能力

日本留学試験において課題とは「日本に留学するに当たって、あるいは、日本の大学に入学後に直面する現実的な諸課題の総称」としている。この課題達成のために求められる言語技能を、聞く、話す、読む、書く、翻訳するという5つに分類し、さらに下位技能として、1. 情報の全体の流れをとらえる、2. 情報の全体を、ある判断や評価をしながらとらえる、3. 特定の情報を抽出してとらえる、4. 推測しながら情報をとらえる、5. 予測しながら情報をとらえる、といった類型をあげている。さらに、試験が想定する課題の類型として、1. 指示を実行する、2. 事物を特定する、3. 事物を描写する、4. 事物を比較・配列する、5. 物事の推移・展開を予測する、6. 物事の背景や意図を把握する、7. 物事を構造化し、法則性を発見する等が挙げられている。

この日本留学試験の課題達成能力に関する考え方は、2-1で述べた日本語教育振興協会プロジェクトの考え方と類似したものであり、日本語学校現場では課題達成能力をいかにして日々の教育活動の中で育成していくかということが、その後の教育実践における大きな課題となった。

3. 日本語学校における課題達成能力育成のための教育実践

3-1 日本留学試験対応授業

2002年6月より日本留学試験が実施され、日本語学校では日本留学試験に対応したカリキュラムが生まれ始めた。日本語教育振興協会が2004年度実施したアンケート調査^③によると、殆どの日本語学校現場で対策授業を実施している。

日本留学試験は、語彙や文法の知識の多寡を問う試験ではなく、課題達成のための日本語力を見ようというものである。すなわち「何を知っているか」ではなく「日本語を使って何が出来るか」を測定しようとする試験である。新試験に対して安易に「傾向と対策」に走るのではなく、試験が求める能力を真に理解し、適切に対応することが重要である。そこで、課題達成能力の育成をめざした教育実践に関して一つのケースを報告し、日本留学試験への適切な対応とはいかにあるべきかを考えることとする。

3-2 教育実践において考慮すべき点

①速読の重視—スキミング・スキミングの訓練

読解授業では、これまで精読中心であり速読は軽視されがちであった。もちろん大学での勉学において参考図書や文献を読み込む力が重要であることは言うまでもない。しかし、素早く読んで必要な情報を読み取る力という場面は講義、キャンパス、日常生活等さまざまな場面で見られる。与えられた視覚情報を素早く読み取る能力の育成には、スキミング(情報取り)、スキミング(大意取り)が不可欠である。新しい試験形式である聴読解試験においては、視覚情報と聴覚情報の並行処理が要求され、スキミング能力が重要な

鍵となる。

②速聴の重視

日本留学試験は日本語能力試験に比べて、聴解力の占める割合が高いことから、日本語学校現場では聞く教育への関心が高まり、授業内容の充実も図られている。特に新しい形式である聴読解に対応した教室活動に対する種々の取り組みが見られる。

速読はこれまでも授業においてさまざまな形で取り上げられてきたが、それに対して速聴ということは現場であまり言われてこなかった。しかし、日本留学試験の聴解・聴読解問題を見てみると、聴覚情報の中から瞬時に必要な情報を選び取り、また不要な情報を捨てるというスキニング的な聴解能力が要求されている。こうした聴解能力は、いわば「速聴」と言えるものであり、これまで十分に教育されていたとは言いがたい。しかし、大学での学習においても、日常生活においても必要な能力であり、今後の予備教育では速聴を重視した教育に取り組むべきであると考えられる。

③論理的能力を重視した作文教育

これまで日本語学校では、限られた期間に出来るだけ多くの知識を獲得することが中心に据えられがちであった。しかし、日本留学試験が記述問題を導入したことによって、現場では書く教育にも力を入れ始めた。また記述問題の新しい評価法「文法的能力と論理的能力の二本立て評価」は、現場教師の意識改革につながった。これまで正確さが重視されてきた作文評価が、立論能力という観点からも考えられるようになったのである。また論理的な文章は上級になってからというのではなく、初級から論理的な文章を書くカリキュラムが取り入れられた。日本語では、日常語彙と抽象語彙との違いは大きく、抽象語彙は漢語に多いということから、初級での作文教育では簡単な語彙で習い覚えた文型を使って事実を述べたり、自分の気持ちを述べるといった作文指導がこれまで多く見られた。しかし、初級の簡単な語彙・文型を使っても論理的な展開は可能であり、例えば「人が大勢いる所でタバコを吸ってもいいか悪いか」という二項対立の問いに初級語彙でも論理展開をし、日本語で言い表すことが出来る。

④書くことと話すことの連携と違いの意識化

初級レベルにおいては「読むこと・書くこと」より「話すこと・聞くこと」が重視される傾向にある。中級に入ると読解が重視され、作文にも時間が割かれるようになるが、明確に話し言葉と書き言葉を意識した作文指導が望まれる。話し言葉＝書き言葉という形式の書く練習から、次第に書く時に多用される語彙や、書く時に特有の文末表現、文体の統一、書く時のデスマス体／ダ体の使い分けなどを意識的に学習し、レポート・意見文を書くといった上級の学習活動へとつなげる必要がある。

⑤語彙知識と予測・推測能力

中級日本語教育の大きな柱の一つは語彙教育である。初級と異なる中級の特徴として漢語系語彙が増加すること、語彙依存度・文脈依存度が高くなること、そして社会文化的知識が要求されることがあげられる。漢語系の語彙が多くなることから、漢語を多く使っていればレベルアップしているような錯覚に陥りやすい。しかし、中級における語彙教育の重要な点は、語彙の持つ多義性、文脈による言葉の意味の違いを知り、使えるようになることである。

出来るだけ多くの語彙を学ぶことが重要であり、特に学術面に関して、あるいはキャンパス特有の語彙を知っておくことは、大学での勉学に大切な要素である。しかし、より重要なことはいかにたくさん抽象語彙を覚えるかということではなく、その語彙の意味を文脈の中で推測することが出来る力があるかということである。日本留学試験では文字・語彙・文法に関する知識を問うてはいない。もちろん語彙の知識は重要であるが、語彙の意味が分からなくても、前後の文脈で何を言おうとしているかが理解できることが重要である。「休講」の意味が分からなくても、それが「教師が講義を休むこと」であることが文脈の中で分かればよい。「語彙力とは語彙量の多寡のみではない。文脈との関連で、その読みや文字だけでなく、語の類別や語義の用法のおよその見当がつけられる判断力と類推力(森田, 1990)」であることを忘れてはならない。

⑥技能統合をめざした教育

大学での学習活動を考えても「講義を聞きながらメモを取る」「資料を見ながら講義を聞き、質問をする」「レジュメを作成し、発表をする」といったように四技能が統合した形で進められていることが分かる。大学での学習生活のみならず、学園生活、日常生活とどの分野においても、コミュニケーションの鍵は技能統合である。初級の段階から練習のバリエーションを考え、技能統合を目指した授業をすることが重要である。実際には次のような活動が考えられる。

既習の語彙や構文を使ってインタビュー・シートを学習者同士で作成する。

シートの項目をもとに質問し、答えを聞き取り、シートに書き込む。

インタビュー・シートをもとにクラスで発表し合う。

⑦批判的思考の重視

日本語学校ではこれまで批判的思考に関してあまり議論されてこなかった。しかし、課題達成能力の測定を目的とする日本留学試験の実施を受け、今後はこういったことにも目を向けた教育がなされるべきである。課題達成に求められるのは、「課題に対して幅広い視野から柔軟かつ総合的な判断を下す力」であり、批判的思考能力とはまさにこのような能力を言うのである。その根底に基本的な知識が求められることは言うまでもない。さらに、批判的に思考するという事は、自分で問いをたて、その答えを探求する「問題解決過程」である(道田, 2001)。日本留学試験に求められる能力は「日本の大学等で学び、学園生活を送るために必要な日本語力」であり、それは論理力、分析力、判断力等の基本的思考能力によって支えられ、その育成には批判的思考力が不可欠なものである。「図1 概念図」においても、能力操作能力や学業日本語運用能力等を支える能力として基本的思考能力があげられている。

3-3 課題達成能力育成をめざした初級からの授業活動

課題達成能力育成のための授業は、初級段階からの実施が重要であり、それこそが日本語学校における予備教育の特徴であると言える。

例えば「家から学校まで」という作文テーマに対して、初級レベルではただ見えるものを書くことで留まっていけないだろうか。初級の授業であっても、習った文型を並べ、「中野駅で電車に乗ります」「電車の窓からビルが見えます」という文の羅列で終わっては発

展性がない。「細い道がたくさんあります。土地が狭いですが、日本人は上手に土地を使っています。私はとてもいいと思います。」という学生の作文に出会える教育実践を心がけるべきである。事実をただ記述するのではなく、自分自身の思考や分析を述べる時に、事実と意見等を意識的に区別して書いたり、取り混ぜながら書くことの重要性を忘れてはならない。初級の語彙、文型でも抽象的、知的なことを言うことが可能なのである。「ふるさと」についても、単に面積、人口、位置などをあげるのではなく「私のふるさと」という思いからの発話、作文になれば、授業活動はさらに深いものとなる。

3-4 課題達成能力育成のためのシラバス試案

表1 予備教育における課題達成能力育成のシラバス案

	読む力	聞く力	書く力	話す力	技能の統合例
上級	<ul style="list-style-type: none"> 資料文献等を精読し、内容を正確に把握する 必要な情報を素早く読み取る 書かれていないことを推論する トップダウンとボトムアップの読み方を使い分ける 幅広い種類の文章を理解する 	<ul style="list-style-type: none"> 表現・内容の複雑な文を聞き取る 不意の情報を正確に聞き取る 社会文化的な含みを聞き取る 内容的にも言語的にも複雑な報告、講義等を理解する 多様な話題に関して正確に聞き取る 	<ul style="list-style-type: none"> まとまった量のレポートを書く 論拠を挙げて意見を書く 要点の箇条書きから文脈のある文章を作成する 資料を見ながら、自分の意見をまとめる 多様な話題に関して表現・語彙を選び詳細に書く 	<ul style="list-style-type: none"> 調べたテーマを発表する 論理的に意見を述べる 場に応じて適切に相手に伝える 的確に質問をする 幅広い会話のストラテジーを使って話をする 	<ul style="list-style-type: none"> 資料に基づきレポートをまとめ、それを発表する 授業を聞きながらノートを取る 記事等を読み意見を書く 相手の意見を聞き要点をまとめ、自分の意見を述べる
中級	<ul style="list-style-type: none"> ある程度の量を速読し、内容をつかむ 文章の構成を意識する 必要な情報を読み取る 場面・人間関係を推測する 	<ul style="list-style-type: none"> 要点を聞き取る 情報を聞き取り、要不要を判断する 多様な指示や説明、報道等を聞き取る 情報の意図を理解する【意見/説明・伝聞等】 	<ul style="list-style-type: none"> 適当な量のレポートを書く 要点を書く 文章構成を意識して書く 書き言葉と話し言葉を意識する 	<ul style="list-style-type: none"> 説得力のあるスピーチをする 場・相手に応じて話す 複雑でないコミュニケーションタスクを遂行する 要点をまとめて話す 	<ul style="list-style-type: none"> 話を聞きながらメモを取り、適切な質問をする 不確かな情報を確認する
初級	<ul style="list-style-type: none"> 短い文章を読んで事実関係を理解する 明確な内部構造がある文を読み、要旨を掴む 	<ul style="list-style-type: none"> 短く単純な話を聞き、キーワードを聞き取る 既習の内容領域の話を理解する 	<ul style="list-style-type: none"> 具体的かつ実際的な話題について書く 自分の考えを簡単に書く 	<ul style="list-style-type: none"> 自分の考えを簡単に伝える 必要な情報を伝える 	<ul style="list-style-type: none"> 情報を聞いて、メモを取る 聞かれたことに適切に答える

(作成 嶋田)

表1は課題達成能力を育成するためのシラバス試案である。日本語能力試験の出題基準のような文字・語彙・文法の項目を積み上げていくという考え方ではなく、どう運用能力をつけていくかを考えたものである。到達目標がどこで、その過程においてどのようなことが求められているのか。今、全体の流れのどこに位置するのか。こういった考え方に基づいて予備教育を行うことが重要である。さらに、初級、中級、上級と段階を追ってされるものとするのではなく、すべての段階を通じてスパイラル、つまり螺旋状に獲得され

ていくものであるという視点を忘れてはならない。表1における螺旋はそのことを表すものである。

3-5 教育実践例—話す教育を絡めた日本留学試験に対応した授業例

次に「話す教育」に関するレベル表を提示する。筆者の勤務校では入学時に全学生に配布し(英・韓・中国語版)、この表に基づいた会話授業および評価を行っている。日本留学試験では会話試験は実施されないが、総合的な試験に対応した授業、コミュニケーション教育を考えるにあたって、会話レベル表を取り上げることとした。

表2 イーストウエスト日本語学校 会話レベル表(抜粋)

	できること	できること
	の目安	の具体例
9	日本で仕事をしても、会話で困ることはない	卒業式、結婚式などでスピーチができる。よく知らない人、目上の人、友達、子供などの話で、自由に言葉の使い分けができる。どんな話題でも議論できる……
8 目標レベル	大学や専門学校での専門的な会話ができる	学校、アルバイト先、毎日の生活において必要な交渉ができる。人から受けた誤解を解くことができる。敬語が使える。 難しい話題に関して、理由を示し議論ができる※……
7 上級	大学や専門学校での基礎的な会話ができる	映画、ドラマ、ニュースの内容をわかりやすく説明できる。制度、文化、考え方などの違いについて話することができる。トラブルが起きた時うまく対処できる……
6 もうすぐ上級	友達と冗談を言ったり、自由に会話ができる	食べ物、生まれ故郷、生活習慣の違いなどが説明できる。身近なニュースについて意見とその理由が言える。友達の誘いを断ることができる。友達との約束を変更することができる……
5 中級	日本の友達を作ることができる	苦しかったり、楽しかった経験について話することができる。友達にノートを借りることができる。友達が映画に誘ったり、約束ができる。友達に謝ることができる……
4 そろそろ中級	日本での生活に言葉であまり困らない	お店、銀行、郵便局へ行っても困らない。切符の買い方など簡単な手順が説明できる。相手のことについて質問できる……
3 初級後半	簡単な会話ができる	自分の家族、仕事、来日した時が言える。好きなものが言える。簡単な質問に答えられる……
2 初級	あいさつ等ができる	あいさつが言える。簡単な買い物ができる……
1 入門	さあ、出発だ!	名前が言える

(作成 口頭表現能力研究班【西川・西部・山中・山辺】)

表2(8)の【難しい話題に関して、理由を示し議論ができる※】に関する教室活動例を報告する。これは、大学での勉学に必要なとされる日本語力に特に関連が深い目標能力だと考えられるからである。問題集や過去問題を数多くこなし、キャンパス語彙をひたすら覚えることを日本留学試験対策授業であるとする予備教育機関もあるが、総合的なコミュニケーション能力を考えることが、試験の求める課題達成能力の育成につながると言える。

タスクシート

日本の大学入試制度について大学生が話しています。

A：入試って、もっと簡単にならないのかなあ。

B：なんで？

A：だって、入学前に必死で勉強したってしょうがないだろう。大学に入ってから勉強しなかったら、やっぱり大学は、入りやすく出にくくするべきだよ。

B：そうかあ。入るのは難しいけど、卒業は簡単だっていうからね。でも、僕たちだけ苦労して後のヤツから楽になるなんてちょっと嫌だなあ。今のままでいいんじゃない？

◆この話についてどう思いますか。意見と理由の部分に注意して考えてみましょう。

◆「討論」の場でも、同じような意見や理由を述べて相手を説得できると思いますか。

(参考：松本茂 (1996) 『頭を鍛えるディベート入門』)

授業の流れ：

【話す教育】

①単純な「おしゃべり」の場面を用意し、意見と理由の部分を探し出す。

②同テーマでも「討論」の場では、意見と理由はどのように変化するかを考えて話す。

⇒同じテーマであっても、おしゃべり、討論等、場面が変わることによって使用語彙・表現のみならず話す内容にも差異が生じること、また「おしゃべり」には目的・論拠は必要ないが「討論」には重要であることを意識化させる。

【日本留学試験に対応した教育】

③討論した結果を踏まえて二項対立の意見文を書く。(記述問題にリンク)

⇒書き言葉と話し言葉の意識化を図り、論拠をあげて意見を述べる練習をする。

④タスクシートのテーマに関連した発表を行う。それぞれが資料を集め、レジュメを作成し、資料を提示してプレゼンテーションに臨む。(読解問題にリンク)

⑤資料を見ながら発表を聞き、メモを取る。(聴解/聴読解問題にリンク)

上記のタスクシートは「大学入試制度」であるが、同じテーマでもさまざまなレベルでの扱い方ができる。教師は、「今は初級後半レベル。この文型を導入定着させ、次はこの項目を……」といった水平思考だけではなく、「今やっていることは全体のどこに位置し、どういう意味を持つのか。」といった縦軸思考を忘れてはならない。同じテーマでも、さまざまなレベルに合わせて取り上げることができ、多様な課題達成能力の育成につながる事が出来る。

例：「大学教育」

大学で何を勉強したいか→どうして大学で勉強したいか→日本の大学生についてどう考えるか→日本の大学生とあなたの国の大学生はどう違うか→日本の大学とあなたの国の大学における問題点は何か(原因と解決策)→教育改革をどう考えるか

4. まとめと今後の課題

課題達成能力を測定しようとする日本留学試験の実施は、日本語学校現場に根本的な見直しを図る好機となった。大学で必要とされる日本語力とは断片的な知識の量ではなく、課題達成能力である。論理力、分析力、判断力等を基盤とした総合的に課題を達成する能力の育成が求められているのである。明らかに日本語学校における予備教育は変化しつつあり、現場教師の意識も変わってきている。

今後の課題として、まず送り出し側の日本語学校と受け入れ側の大学との多面的な連携をあげたい。教育上の一貫性がなければ、留・就学生の日本語教育は効果的には行えない。さまざまな形でのネットワーク化が進められているものの、まだ日本留学試験をめぐる連携は緒に就いたばかりだと言えよう。

同時に日本語学校間のさらなる連携の重要性があげられる。現場における理論構築、新たな視点での教育実践に向けてさまざまな形の連携が求められる。

注

- (1) アジア学生文化協会留学生日本語コース他2校『日本語能力試験と日本語学校教育上の諸問題に関する調査研究』の報告書において、日本語学校での日本語教育が日本語能力試験の存在で大きな影響を受けていることが記されている(p.42)。
- (2) 『「日本留学のための新たな試験」について—渡日前入学許可の実現に向けて』(2000)に記されているシラバス(p.12~16)によって現在も実施されている。
- (3) 日本留学試験分析委員会(2005)『平成16年度第1回日本留学試験に関する調査分析』によると、日本語科目の対策授業を実施していない学校は回答学校数299校のうち僅か19校であった(2004年度)。

参考文献

- (1) アジア学生文化協会留学生日本語コース・イーストウエスト日本語学校・インターカルト日本語学校(1999)『日本語能力試験と日本語学校教育上の諸問題に関する調査研究—新外国人留学生試験実施に向けて—』平成10年度文部省補助事業
- (2) 基礎日本語教育研究プロジェクト(2000)『日本語学校生(就・留学生)のための基礎日本語能力』日本語教育振興協会
- (3) 基礎日本語教育研究プロジェクト(2001)『運用能力獲得のための基礎日本語教育—進学希望者を対象として—』日本語教育振興協会
- (4) 立野みどり・嶋田和子他(2001)『留学生・就学生に日本語コミュニケーション能力を涵養する—初級の教室活動案作成を通して—』平成12年度文部省補助事業
- (5) 立野みどり・嶋田和子他(2002)『留学生・就学生に日本語コミュニケーション能力を涵養する—中級の教室活動案作成を通して—』平成13年度文部省補助事業
- (6) 日本語教育振興協会(2004)『平成15年度日本語教育機関実態調査』日本語教育振興協会
- (7) 日本留学試験分析委員会(2005)『平成16年度第1回日本留学試験に関する調査分析』日本語教育振興協会
- (8) 「日本留学のための新たな試験」調査研究協力者会議(2000)『「日本留学のための新たな試

験」について—渡日前入学許可の実現に向けて』

- (9) 松本茂 (1996) 『頭を鍛えるディベート入門 発想と表現の技法』講談社
- (10) 道田泰司 (2001) 「批判的思考—よりよい思考を求めて」森敏昭編『認知心理学を語る3 おもしろ思考のラボラトリー』北大路書房
- (11) 森田良行 (1990) 『日本語学と日本語教育』凡人社

(イーストウエスト日本語学校)